



伊藤セツ著

『国際女性デーは大河のように』

川口 和子

3月8日、今年も国際女性デーの集会在全国各地で、また世界各地で開催された。日本婦人団体連合会主催・中央集会のスローガンは、「イラク派兵即時撤退」「憲法改悪反対」「許すな雇用と暮らしの破壊」等であった。

本書はこの国際女性デー、女性の権利と国際平和をめざす女性運動の国際的連帯行動について、その歴史と意義を再確認しようとするものである。

プロローグ。(一) 知ってますか？ 1977年の国連総会が国際女性デーを決めたことを。(二) 女性デーはアメリカ社会党の女性のアイデア。(三) 国際女性デーの誕生——ドイツの女性運動との合流。(四) ロシア革命と第3インターナショナルを潜り抜ける女性デー。(五) 日本の女性デーのエポック。エピローグ。

以上の構成が示すように、国際女性デーが20世紀初頭のアメリカとヨーロッパの社会主義女性運動を起源とし、激動する世界史の波濤を乗り越えてきた。国際社会主義運動とも深く関わりながら蛇行してきた軌跡を、「難所というべき」ロシア革命とコミンテルンについても「都合よく解釈するのではなく、ありのままに」との真摯な姿勢を貫きながら著者の長年の研究蓄積を駆使して跡づけられている。その日本における戦前・戦後も簡潔に整理され、とくに国連決議によって「国連デー」とし認知され、21世紀に入った今日まさに「大河のように」その裾野を広げている動向は、あまり知られていないだけに注目されよう。関係する写真も豊富に添えられ、クイズ形式も取り入れるなど、若い人達にも読みやすい工夫も見られる。

著者の伊藤さんは、国際女性デー誕生の産みの親

ともいえるクララ・ツェトキンの研究者であり、労働総研理事でもある。国際女性デーに関わる論考も多い。とくに1980年に出版した共著『国際婦人デーの歴史』(校倉書房。伊藤さんが国際篇を、小山伊基子さんと私が日本篇を担当)は、すでに絶版となつて久しく、また今日の国際女性デーの多様な潮流による広がりや、感慨深く喜びながらも、その多彩な取り組みに史実が埋没し忘れ去られることのないように、そして国際女性デーの新たな創造をとの願いが、著者の本書執筆の動機と記されている(プロローグ、あとがき)。

校倉書房版で共同執筆した当時私達は、なぜ、何時から「3月8日」なのか、日本の第1回女性デーは1922年か23年か、等から始めざるを得なかった。その一人としての個人的感想をつけ加えるなら、その後も困難な資料の収集などたゆみない努力を重ねてこられた著者の研究姿勢に敬意を表したい。とくに今回、国際女性デーの流れをふまえて、日本にそれが導入されたのは「ロシア革命色と第3インターナショナル色、一色だった時期」とされた著者の規程は肯定できる。厳しい弾圧のもとでの戦前日本の国際女性デーの足どりを辿るために特高警察の資料も使ったことなど、かつての日々が感慨深い。それだけに、ロシア革命と深く結びついている「3月8日」が、「国連デー」となった今日もそのまま引き継がれていることに「女性デーの生命力」を感じるとの著者の指摘に共感する。

今や大河となった国際女性デー、「それは何に向かって流れていくのか」。本書は単純ではない21世紀のオルタナティブのもとで、地球規模で広がりつつある「ノー・ウォー」の大河との重なり「新たな歴史の可能性を予感」して閉じられている。本書が、女性運動に携わる方達だけでなく、多くの若い方達に読まれることを期待したい。

(2003年8月・御茶の水書房刊・2600円)

(かわぐち かずこ・労働総研理事)